

戦後日本人の 五つの忘れ物

民族の明日を決める価値概念

あの戦後の廃墟の中で食べることにさえ事欠いていた暮らしから見れば、いまの日本人は豊かさの中にどっぷり浸かっている。奇蹟ともいわれる富の構築そのものは、わが民族の誇りといってもいい。

だが、その豊かさを握むにつれて、様々の大切なものを失ったことに気づく。

その最たるものが、国家観が希薄になったことであろう。立法府(国会)の与党の中ですら「愛国心」と言ったら偏狭なナショ

ナリズムにつながると反対する始末である。国家の役割は、領土と国民の生命を守り、国民の築いた財産を保全することにある。

それなのに、竹島・北方四島が他国から実効支配されて久しいし、拉致の事実が明らかになっても解決に何等進展を見ないのに、国政に参画する人たちにすら国難に立ち向かう覇気がまったく見られない。明治十年に作詞された「蛍の光」の三番、四番を紹介しよう。

三、筑紫※1のきわみ 道の奥※2
海山遠く へだつとも

そのまごころは へだてなく
ひとつに尽くせ 国のため

四、千島の奥も 沖繩も
八州のうちの 守りなり
到らん国に いさおしく
つとめよわが背※3 つゝがなく

※1…九州 ※2…東北地方 ※3…わが夫

五世紀間にわたった西洋列強の植民地政策の魔手から逃れて、危うく近代国家づくりに成功した明治の人たちの、愛国の気魄が伝わってくる。日清・日露戦争のはるか以前に作詞され、いささかの軍国的要素も

ないのに戦後消されたままになっている。道路財源で揉み合う力があるならば、この三、四番の復元の勇気を持ったらどうか。国防の基本は愛国心にある。公を忘れて個のみにはしる民族に明日はない。

第二の忘れ物は「義務」の喪失である。「権利」と「義務」は常に表裏一体で初めて成り立つ価値概念である。子供の学校給食を受けながら二十数億円もの給食費滞納を見逃しておくわけにはいかない。

二宮尊徳は、酒匂川の土木工事に病身の父親代わりに参加したが、子供の非力(義務の不足分)を夜なべで草鞋をつくって穴埋めしたそう。

権利のみの主張に終始し、義務を顧みないこの戦後の大きな忘れ物を強く恥じねばならない。

正すべき親の勘違い

第三は、戦後の日本人は叱ることを忘れてしまった。叱ることは戦前の悪い風習と勘違いしている親が多い。

昔の諺に「子供は叱るな来た路じゃ。年寄り笑うな行く路じゃ」とあるが、理に合

わぬ叱り方をするな。自分の歩んできた路だから愛情の裏打ちをしてしかと叱れということなのである。福沢諭吉の説くとおりの「父母は習慣の教師 家庭は習慣の道場」なのである。

子供の幼児期はしたい放題したいのが当たり前である。だから外で遊ぶことの多かった戦前の子供たちが悪さをしたり、弱い子いじめをする、必ずどこにも怖いおじさんがいて、大声で叱られたものだ。

会津若松藩の「什の教え」には、「虚言を言ってはなりません」とか「卑怯な振る舞いをしてはなりません」とか列挙してある。つまり「ならぬことはならぬものなり」としっかり基準を教え、躰たがけ、それが守られない時は強く叱ってこそまともな子供に育つものなのだ。

叱ることが罪悪で、甘く育てることこそが親の愛と錯覚している昨今の親の病は重い。

第四の日本人の忘れ物は、褒めることが下手になったことである。名将山本五十六は「やってみせ、言ってみせ、聞かせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ」と喝破した。

叱ることを忘れたいまの親たちは逆に褒める基準も分らないし、そのタイミングも、効果的褒め方も、さっぱり分からなくなっている。

叱るべきをきっちり叱る人から褒められると、褒められる側の喜びは倍加する。これは宇宙の所作(はたらき)はすべて陰陽の理法が働くからである。

五つ目は、昨今の日本人は忍耐を忘れてしまったことである。ドラマ『おしん』はアジア諸国でもはやされた。辛苦を重ねた人々から強い共感を呼んだのであろう。耐えてこそ明日につながるのが世の常なのに、近頃の日本人はすぐキレる。勉強せよと言われた孫が祖父を殺す。悪口を言われただけで学友を刺し殺す女生徒。毎年三万人を超える自殺者。何とも重い病だ。明治の先人たちは、三国干渉で遼東半島を仏独露に奪い返された時、「臥薪嘗胆」と耐え忍んだからこそ、その後の栄光の歴史につながったのだ。

家康は「堪忍は無事長久の基。怒りは敵と思へ」と説き、「法句経」は「怨みに報ゆるに忍を行ずれば、怨みを息むことを得」と教えてくれている。

